

森弘子聞き書き

ひとすじの  
梅の香

南里義則

海鳥社

森弘子聞き書き　ひとすじの梅の香 ● 目次

装画・石坂香枝

## 宝満山を再び祈りの山へ

祈りの山に峰入り	16	願いを込め護摩炊き	18
宝満山研究を始める	20	山に曼陀羅を布く	22
結婚、出産の合間に	24	初めての本を出版	26
宝満山修験会成る	28	命脈を保った修験道	30
五感で修行初体験	32	修験道が再び定着	34
山頂で国家的祭祀	36	最澄の足跡を再現	38
脊振山に浄土を見る	40	平石坊と仙厓和尚	42

## 市民参加のまちづくりへ向けて

父、仙厓師に心酔	46	理想の博多商人像	48
父の信仰生活と私	50	DNAを受け継ぐ	52
パイプ役になろう	54	激動の大宰府史跡	54
生涯の友との邂逅	58	田村圓澄先生の縁	60
大宰府アカデミー開講	62	予想上回った反響	64
飾らない竹内理三先生	66	九州歴史資料館草創期の人々	68

## 現代人と古代人を結ぶ万葉の心

在野からも講師に	70	講義の内容を本に	72
史跡解説員誕生へ	74	キワニス賞を受賞	76
万葉集によるまちづくり	80	古代と現代を結ぶ歌	82
万葉の先進地、高岡	84	万葉の集いが実現	86
古代食再現に挑む	88	政庁跡で梅花の宴	90
器と衣と舞も再現	92	食の原点探しから	94
命にいい食を教える	96		

## 住民の誇りを呼び覚ました人々

基層文化を土台に	100	九州国立博物館で開館の式典	102
志伝える石碑三基	104	藤井功さんの登場	106
新発見を「誇り」に	108	史跡は地元で守る	110
原点は岡倉天心か	112	西高辻信貞宮司の夢	114
天満宮の中興の祖	116	神社は共感の広場	118
詩人安西均と西高辻宮司	120	要の有吉林之助氏	123

## まちづくりの中核・九州国立博物館

「ミュージアム九州」創刊	120	風水思想を論じる	128
予想超える入場者	130	多彩に天神さま展	132
市民と共生目指す	134	昔のやり方に帰る	136
市民協同型 I P M	138	地域づくりの核	140

## 物語に彩られた地域文化の継承

市史編纂委員会が始動	144	貴重な証言を得る	146
執筆にも市民参加	148	市民活動の広がり	150
富永朝堂先生の記念展	152	能への思い果たす	154
『太宰府発見』本に	156	祭りを支える共同体	158
海の者が山をほめる	160	トトロ型社会を望む	162
姥が懐の景観残る	164	空間の履歴を読み解く	166
熱気あふれる市民塾	168	市民自ら現場調査	170
市民遺産を生かそう	172	伝えたい連歌文化	174

## 時空を超えて人をつなぐ絆を

高取正男先生に導かれ	178	環境歴史学を志す	180
宝満山実地踏査へ	182	山里の祈りの継承	184
図らずも賞をいただく	186	共同研究でパリへ	188
ふるさと思う志	190	それぞれの香りを	192
次代にたすき渡す	194		

森弘子関連年表 197

森弘子著作一覧 209

あとがき 213

邂逅——感謝にかえて 森弘子 219

森弘子聞き書き

ひとすじの梅の香

皆さんは「太宰府」から何を連想しますか？ 千三百年ほど前に大和朝廷が九州を治める拠点とした太宰府政庁（都府楼）跡、学問の神さま・菅原道真公を祭る太宰府天満宮、昔の山伏の修験道の場で今は多くの登山客でにぎわう宝満山……。

福岡都市圏の南部に位置するこの古都に、思い描く像は人それぞれでも、歴史の厚みには誰もが共感するのではないでしょうか。その共感をすくい取ったような詩があります。

古い鍵の形をした町を歩くと

私の心のなかでしづかに開く重い扉がある

その奥から流れてくる一すぢの梅の香

天の牛車ぎっしゃのほのかな影が軋きしり

心の砂に轍わだちのあとを残す

科<sup>とが</sup>なくてこの世の平安を追はれゆく

優しいひとを乗せながら

まぼろしの牛車にまつはる

梅ヶ枝のつばらな光

砂のしのび音<sup>ね</sup>……

見えざる扉の奥から

古い童謡のやうな梅の香が流れてくる

私の薄暗がりな過去のあたりから

福岡県筑紫野市出身の詩人、安西均<sup>ひとし</sup>の「童謡——太宰府にて」です。私が太宰府天満宮文化研究所に入った二十二歳のころ、ラジオから朗読が流れ、時空を超えたそのドラマチックな内容が私の心の琴線に触れました。今回の表題はこの詩から頂きました。

近年の太宰府のビッグニュースは、平成十七（二〇〇五）年十月の九州国立博物館開館ですね。「古代以来、アジア文化の接点だった地に国立博物館を」と地元を挙げた誘致の成果でした。昭和五十六（一九八一）年に財団法人「古都大宰府を守る会」の文化部長を拝命、平成十七年二月

には「太宰府発見塾」の塾長を任され、太宰府の歴史や文化を市民の皆さんと発信してきた私にとっても宿願の成就でした。

けれども、この地では今も開発が進んでいます。歴史を刻んだ景観の保全か開発か。開発優先できた戦後日本の、避けて通れない問題です。

平成二十一年正月、NHKテレビで「につぼん巡礼——あなたの心がかえる場所」が放映されました。印象深かったのが、俳優の緒形拳さんがルーツを求めて大分県豊後大野市（旧緒方町）の緒方神社を訪れた場面。自分の顔に風が吹き付けた瞬間、緒形さんは「先祖に」歓迎されているな」とおっしゃった。亡くなる直前だった緒形さんは一陣の風に、時を超えた先祖との「つながり」を体感されたのですね。

太宰府の多様な価値について発信してきた私の活動の目的もまさにそれ。「心のふるさと」を次世代に伝えたい、という一点に尽きます。

宝満山を  
再び祈りの山へ

## 祈りの山に峰入り

朝から夏本番のような強い日差しでした。太宰府天満宮の東北にそびえる宝満山（八三〇メートル）で平成二十一（二〇〇九）年五月十日、修験道の修行の一つ「峰入り」が行われました。毎年五月の第二日曜日にあり、一般登拝者も参加します。

午前九時すぎ、山伏を先頭に約七十人がふもとの竈門神社を出発。「結界」（修行場の境界線）である二合目の一の鳥居で、山伏が新たな入山者と質疑応答をします。入山問答です。頭にかぶった頭巾や手に持つ錫杖などの意義を、独特の口上でやりとり。これに合格すると、弓や剣で作法をして再び登り始めます。石の階段が多く、七合目前の「百段がんぎ」は特に難所。汗だくで登り、中宮跡を経て昼食。尾根続きの仏頂山の山頂経由で宝満山頂の上宮に着き、勤行で終了です。参加者のすがすがしい笑顔が印象的でした。

九州大学大学院で原爆児童文学を専攻するイタリア女性のティベリ・ロベルタさんや、米カリフォルニア大学で日本文化を教えるロバート・ボーゲン教授も参加。特に山伏姿のロベルタさんは「自然の中での修行で宗教を体験する点が魅力」と、終始真剣な表情でした。下山の途中、彼らと共に、古代以来の修行場の一つ、大南窟の薄暗い窟内で、山伏の方たちに神秘的な「入山灌頂」（宝満修験者として認める儀式）をしていたきました。



宝満山の頂上、竈門神社上宮で勤行する峰入り参加者

この宝満山の歴史的な背景について、少し話しておきましょう。

六六三年、朝鮮半島・白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れた大和朝廷は九州の防衛を固めるため、水城（太宰府市・大野城市）や大野城（大野城市・太宰府市・宇美町）、基肆城（佐賀県基山町・筑紫野市）を築造。その中核施設が九州統治の拠点とされた大宰府政庁です。宝満山はその東北、いわゆる鬼門にあたるため、鬼門よけの八百万神を祭ったのが信仰の始まり、と伝えられています。

六七三年、修行中の心蓮上人が「我、現国を守り民を鎮護せん」と告げる玉依姫の示現（神仏が衆生救済などのために姿を現すこと）を得たと天武天皇に上奏、同天皇が上宮を建てたと伝えられます。峰入りで仏頂山頂を経由するのは、開山の祖・心蓮を祭る祠があるからです。

そのような解説を、平成二十一年も私が峰入り参加者の皆さんにしました。宝満山は私のライフワークなのです。

## 邂逅——感謝にかえて

三年ほど前、突然、西日本新聞社の南里義則さんからお電話を頂きました。南里さんは私が太宰府天満宮文化研究所から財団法人古都大宰府を守る会（現古都大宰府保存協会）に転職した頃、筑紫支局の記者として赴任しておられました。何かと驚く私に、またまた驚きのお言葉です。「西日本新聞の聞き書きシリーズにご登場願いたい」と。

「あのシリーズには、功成り名遂げた方がご登場なさるのでは？ 私はまだ若いし、第一私のささやかな人生なんてそんなシリーズの記事にはなり得ない」と思っているところに、たたみかけるように、私の尊敬する太宰府天満宮の前宮司様の晩年に、このシリーズへの登場の話があったけれども果たせなかったこと、また大宰府史跡の保存に命を捧げられた藤井功さんのことも、長年大宰府の史跡に関わっている私から聞きたいとのこと。

それならばとお引き受けし、約半年の取材を経て、このシリーズは平成二十二年一月三日から四月十四日まで連載されました。ちょっと私の前に出すぎた感じもありますが、太宰府の史跡が多くの方々の努力によって保存され、現在、その歴史遺産を活かしたまちづくりが推進されているプロセスがよく表現されていて、南里さんが意図された太宰府の現代史が見事

に綴られており、また、私が次の世代に伝えたい想いまでも……と、有り難く思いました。

南里さんが筑紫支局におられた三十年前、太宰府は市制施行し、有吉林之助氏が初代市長となられました。有吉市長は、西高辻前宮司とは竹馬の友であり盟友でもありました。そして後に、財団法人古都大宰府を守る会の理事長となられたのです。戦後太宰府をつくられたと言っても過言ではないお二人に身近に仕えた私は、本当に果報者ですし、そのお二人の想いを引き継ぐことが使命だとも思っています。

太宰府市制施行の昭和五十七年は、ちょうど宝満山の開山心蓮上人の千三百年遠忌の年に当たっていました。これを記念して、兼ねて親交のあった宝満山ゆかりの山伏の方々と宝満山修験会を結成し、入峰・採灯大護摩供を復興したことや、翌五十八年の九州歴史資料館開館十周年を記念して、それまでの発掘調査や太宰府学の研究成果を一般の方々に知っていただくための講座「大宰府アカデミー」を企画したことが南里さんの印象に残っていたのでしょうか。

南里さんは、大宰府アカデミーの計画をスクープされ、それが新聞紙上に載った日には、受話器を置く間もないほどのひっきりなしの電話に、守る会の事務所がパンクしそうになった日のことが懐かしく思い出されます。今でこそ、大学も博物館も一般市民に開かれています。が、当時はこのような講座は皆無と言ってよいほどの時代でした。南里さんは、講義内容

の要約を西日本新聞に連載してください、千百五十人という受講希望者のうち、選にもれた方々への対応にも心強い応援をしてくださいました。

当時、九州歴史資料館長は、「学問が象牙の塔に籠もることなく広く一般に伝えられるべき」とのお考えの田村圓澄先生であり、有力な地元紙の記者が、大宰府史跡発掘調査指導委員会委員の八木充先生の教え子の南里義則さんであったことも、思えば不思議なめぐりあわせであり、今日の太宰府のまちづくりの礎として本当に仕合わせなことでした。

これを出発点として、大宰府史跡解説員が誕生し、その後も、市史編纂や、万葉植栽、市民遺産調査の活動など、市民の皆さんと研究者、行政が一体となって景観・歴史まちづくりの人の輪は大きくなっています。それに関わり続けさせていただいていることも、有り難いことです。

あらためて南里さんが綴ってくださった私の半生を読み返してみても、何と多くの方々との邂逅に恵まれ、多くのことを成し遂げることができた人生だったかと、幸せを感じています。今回の出版に際しては、主人森五郎が、大いに後押ししてくれました。出版をお引き受けくださいました海鳥社の西俊明社長、杉本雅子さんにも感謝申し上げます。また表紙には、美術大学で学んだ二女石坂香枝が描いた絵を使わせていただきました。聞き書きに登場の少なかった長女荒川満智は、妹弟をよくまとめてくれています。八人の孫もできました。大郎

と嫁の秀衣もがんばってくれています。日々、幼子の声の聞こえる生活はいいものです。  
素晴らしい両親、素晴らしい師、素晴らしい友、素晴らしい仲間、素晴らしい家族、そして南里義則さんに心から感謝を捧げます。

平成二十四年二月

梅の香につつまれて 森 弘子

本書は二〇一〇年一月四日から四月十四日まで「西日本新聞」に連載された  
「聞き書きシリーズ——ひとすじの梅の香」に加筆・訂正したものです。

南里義則（なんり・よしのり）

1952年、佐賀県生まれ。山口大学文学科（国史学）卒業後、1977年、西日本新聞社編集局入社。筑紫支局、社会部デスク、北九州支社編集部長、熊本総局長を経て、現在、紙面審査管理室長。



もりひろ こき が ひとすじのうめのか  
森弘子聞き書き ひとすじの梅の香

2012年2月25日 第1刷発行



著 者 南里義則

発行者 西 俊明

発行所 有限会社海鳥社

〒810-0072 福岡市中央区長浜3丁目1番16号

電話092(771)0132 FAX092(771)2546

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

ISBN 978-4-87415-836-4

<http://www.kaichosha-f.co.jp>

[定価は表紙カバーに表示]